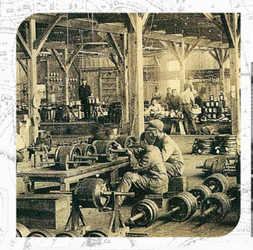
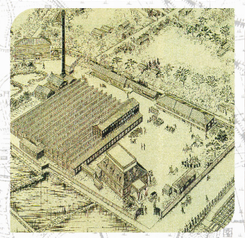
大崎歴史発見物語

おおさき今昔MAP





01｜日本初の「洋式ガラス工場」

明治6年、沢庵和尚ゆかりの地、北品川・東海寺境内の目黒川畔に、当時は海に近い河口としての地の利のもとに創設された「興業社」、後に官営の「品川硝子製造所」その後、明治18年には民間の「品川硝子会社」となりましたが、やがて板ガラス製造の失敗などにより明治25年には解散となりました。

(左)明治9年に「品川硝子製造所」として建てられたレンガ造平家建ての建物部分は、昭和44年に愛知県・犬山市の「博物館明治村」に移築され、登録有形文化財として保存展示されています。(右)明治21年、「品川硝子会社」で製造された、日本で初めての大量生産によるビール瓶

02｜大崎の地に根付いた「明電舎」

大正2年、大崎2丁目の約6000坪の土地に、工場を創設、当時、まだキツネやタヌキも出没する池と水田の地。電力事情も極めて悪く、隣接の大崎貨物駅から車両が発車するたびに電灯が一斉に暗くなる始末。さらに飲み水も少なく、大井戸を掘り飲料水に充てていました。同じ大崎でも、目黒川の川沿いに進出した他の多くの企業と異なり、ここはまだ〝未開の地〟でした。その後大崎貨物駅を物流拠点として、明電舎はその後、地の利を生かし世界インフラ企業へと飛躍的発展を遂げていきます。

池と水田の地に立てた明電舎大崎工場の披露式(大正4年)

03｜日本初のベアリング製造「日本精工」

身近な家電製品から人工衛星等に至るまで、世界にベアリングを供給し続けてきた「日本精工」。大正3年「日本精工合資会社」の本社工場として、当時の東京府荏原郡大崎町字居木橋410番地に産声をあげました。そこは大崎の現在の繁栄とはおよそかけ離れた田園地帯の一角、隣地には屠牛場と牛舎数棟があるだけ。ここから100年超の歴史を重ね、世界に名だたる日本精工のベアリングや精機製品づくりの先進技術が育まれていったのでした。

日本精工株式会社創立5年後の大正10年の大崎工場

04｜国産初の大型オートバイ「陸王」

陸王は昭和10年、製薬企業の三共(現在の第一三共)の系列会社「三共内燃機」の手により米国ハーレーダビッドソンの国産化を通じて誕生しました。後に「陸王内燃機」と社名を変えたその製造工場(品川工場)からは年間数千台のオートバイが生み出され、やがて昭和12年には日本陸軍の軍用車として大量生産され大陸を駆け回っていきます。大出力でタフな環境に強いその実力を遺憾なく発揮しました。

陸王内燃機・品川工場に並ぶ陸王

軍用オートバイとして使用された97式陸王

05｜日本初の飛行船が飛んだ

ものづくりのまちとしての大崎、そのルーツは、明治の時代から富国日本の根幹をなす製造業の地として発展し始めた歴史的背景がありました。目黒川河畔の地に、将来を賭して建つ先端技術の製造拠点群。日本初の飛行船を生み出した(株)気球製作所もその一つ。明治43年「山田式一号飛行船」のテスト飛行で大崎から駒場までの7Km。これが日本人の作った飛行船の飛行記録第1号でした。

「山田式一号飛行船」数々の試行錯誤の結果生み出されました。大崎での初飛行成功に因み、航空日(現在の「空の日」:9月20日)が制定されたとされています。)

大崎から日比谷、愛宕山へと周り大崎に帰還。約20kmの飛行に成功し、東京上空を初めて一周した「山田式三号飛行船」

06｜都内随一の大植物園「妙華園」

かつて三ツ木村や苗木村と呼ばれていた地(現在の西品川一、二丁目)に一万坪もの花畑が広がり、そこでは水性植物を始めスイレンやバラ、ランなどの当時珍しかった西洋植物が栽培されると共に、小動物園などの遊園施設も備えて多くの人々を集めていました。「妙華園」と呼ばれたその植物園は、一時は向島百花園をもしのぐ東京の名所として知られたほどで、当時のこの環境がメロンを特産品として栽培できるほど園芸に適した地でした。

07｜茶室のテーマパーク「大崎苑」

江戸時代、「大崎屋敷」や「大崎苑」とも呼ばれた出雲の国(島根県)松江藩松平家の江戸下屋敷が現在の北品川五丁目付近にあり、そこには千利休が造った「独楽庵」をはじめとする11もの茶室が広がっていました。松江藩松平家は徳川家康の次男を祖とする大名で、この大崎屋敷の主となったのは七代藩主、松平治郷(不昧公)でした。不昧公は江戸時代の代表的な茶人の一人で、不昧流と称される大名茶を完成し、茶禅一味を追求したことで知られています。

島根県出雲市の「出雲文化伝承館」に復元された「独楽庵」

08｜名僧沢庵が生涯を閉じた地「東海寺」

沢庵は徳川家光に北品川三丁目にある東海寺の開山に任命されました。沢庵漬けの名の由来ともされる大根の「貯え漬け」にまつわるストーリーも、ここ東海寺から生まれたとされています。美食を極めた家光に保存食だった漬け物を〝逸品料理〟として褒めたところ、空腹だった家光がその素朴な味わいを気に入り、その名を「貯え漬け」ではなく「沢庵漬け」とせよ、と命じたとされるこの逸話も、贅を排し質実な暮らしの大切さを将軍に諭した名僧沢庵の人となりを伝えています。

沢庵が息を引き取る間際に書いたとされる「夢」の一字